

日産科学振興財団 理科／環境教育助成 成果報告書

回次：第 **3** 回 助成期間：平成 **18** 年11月1日～平成 **19** 年10月31日

テーマ： 自然や身近な人々、地域との豊かなふれ合いを通した理科、生活科、総合的な学習に時間(環境教育)の展開

氏名： 津田 忠久 所属： 横浜市立森の台小学校

1. 課題の主旨

I 地域の里山である「県立四季の森公園」での体験活動

1年生 — 生活科で自然と直接かかわる活動や体験

2年生 — 同上

3年生 — 理科「こん虫を調べよう」での観察活動

4年生 — 理科「生き物たんけん」での年間を通した観察、体験活動

5年生 — 理科、総合的な学習の時間での「稲作体験」、「わたしたちの町の里山『四季の森公園』での体験活動、自然観察活動(社会科での環境教育も含む)

6年生 — 理科「生き物のくらしと自然環境」での自然観察活動

II 自然や身近な人々、地域との豊かなふれ合い活動を通した理科、生活科の授業研究

生活科 — 具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもって、進んで学習する子をめざして

理科 — 観察、実験、栽培、飼育など、自然の事物・現象への意図的・計画的な働きかけをもとに問題解決していく子をめざして

III 全校でのリサイクル活動

① 各クラスでの資源の分別活動

- ・ 白系古紙、色系古紙、ミックスペーパー、プラスチック、その他のごみの5種類に分ける活動を1年生から6年生までの各クラスで行う。

② 給食の残りによる肥料作りと活用

- ・ 作った肥料は、各学年及び栽培委員会での栽培活動で使用するだけでなく、希望する家庭や地域にも配布し、環境教育の重要性を啓発していく。

③ キッズキングダム(学習発表会)でのごみ削減に取り組む

- ・ 昨年度の反省を元にごみを出さない取り組みを実施する。

2. 準備

活動の柱は、地域の自然を生かした授業研究、身近な地域の人々の交流、身近な環境教育の実践である。

- 1) 「四季の森公園」を題材とした教育課程に基づいた授業実践と検証
- 2) 稲作作りの会、里山研究会、炭焼きの会などの地域ボランティアとの連絡調整及び関連機関との連絡調整
- 3) 学校内でできるリサイクル、リユースの実践場面の検討

3. 指導方法

- 1) 地域の自然を生かした授業研究
 - ・ 18年11月に研究の方向性を確認する。その計画に基づき、19年3月までの間に、理科、生活科の授業
 - ・ 平成19年4月からは、理科、生活科、総合的な学習の時間の授業を10月までの間に、各学年2回の授業実践を計画し、校内研究会を実施する。
- 2) 身近な地域の人々を通じた自然観察及び体験活動
 - ・ 稲作及び収穫祭実施のため協力者である、稲作の会、新治中部地区連合自治会と活動計画を立て、協力依頼して実践する。
 - ・ 四季の森公園の樹木に樹名板を取り付けるため、間伐材の活用や作成方法について環境事業局職員、里山研究会のメンバーと打ち合わせを行い実践する。
 - ・ 給食において農薬の少ない野菜あるいは無農薬栽培に取り組む地元の農家の野菜の活用ができないか、地元のJAと連携し計画を進める。
- 3) 身近な環境教育の取り組み
 - ・ 5種類のごみの分別に取り組む方法をクラスごとに工夫させ、自ら進んで活動できるよう支援する。
 - ・ 学校での利用だけでなく、保護者・地域には学校便り等を通して周知を行った。
 - ・ キッズキングダム（学習発表会）では、昨年度多くのごみが出たため、児童代表委員会及び児童実行委員会で児童が自ら取り組めるよう意識付けをする。

4. 実践内容

- 1) 地域の自然を生かした授業研究
 - ・ 18年11月に研究の方向性を確認した。その計画に基づき、19年3月までの間に、理科、生活科の授業を実施した。授業は1年から6年まで全学年で実施した。
 - ・ 平成19年4月からは、理科、生活科、総合的な学習の時間の授業を10月までの間に、各学年2回の授業実践を行い、校内研究会を実施した。
- 2) 身近な地域の人々を通じた自然観察及び体験活動
 - ・ 18年11月 稲刈りと収穫祭を実施した。また12月には収穫したい稲わらでわら細工に取り組んだ。（協力者は、稲作の会、新治中部地区連合自治会）
 - ・ 19年2月 四季の森公園の樹木に樹名板を取り付ける。間伐材を利用して、焼き板を作り、樹名を書き、穴を開けて、四季の森の機に取り付ける。（指導者は、環境事業局職員、里山研究会のメンバー）
 - ・ 平成19年6月から、環境教育の一視点として、地産地消に取り組んだ。
 - ・ 19年7月 自然観察会「植物ってなに」「食物連鎖のトップランナー」「生態系」について学習した。
- 3) 身近な環境教育の取り組み
 - ・ 5種類のごみの分別に取り組むために、クラスごとに活動を工夫し分別に取り組ませた。
 - ・ 残飯を活用した肥料の活用を学校での利用だけでなく、保護者・地域には学校便り等を通して周知を行い化学肥料ではない有機肥料の活用をすすめたい。また給食の残飯の減量に取り組んだ。
 - ・ キッズキングダム（学習発表会）では、昨年度多くのごみが出たため、児童代表委員会及び児童実行委員会がごみの減量をテーマのひとつに加えて取り組んだ。

5. 成果・効果

1) 地域の自然を生かした授業研究

- ・ 18年11月から19年3月までの間に、理科、生活科の授業を実施した。授業は1年から6年まで全学年で実施した。
- ・ その結果、生活科では今までの本校の教育課程では、1年生の学習内容と2年生の学習内容が整理されていないことがわかり、来年度以降教育課程の再整備が必要であることがわかった。
- ・ また、1, 2年生とも「四季の森公園」での活動時間を増やすことにより、自然や季節の移り変わりなど、自分の生活と密着した学習を進めることができた。
- ・ 自然の変化や季節の移り変わり、森にある木々の種類に目を向けるなど、新たな気づきがあった。

2) 身近な地域の人々を通じた自然観察及び体験活動

- ・ 18年11月 稲刈りと収穫祭を実施した。また12月には収穫したい稲わらでわら細工に取り組んだ。(協力者は、稲作の会、新治中部地区連合自治会)自然の恵みと農作業の大変さを実感した。
- ・ 19年2月 四季の森公園の樹木に樹名板を取り付ける。間伐材を利用して、焼き板を作り、樹名を書き、穴を開けて、四季の森の機に取り付ける。(指導者は、環境事業局職員、里山研究会のメンバー)
- ・ 平成19年6月から、環境教育の一視点として、地産地消に取り組んだ。jもとの生産者を講師として授業身招き、米作りについて学んだり、どのような気持ちで無農薬や農薬の少ない栽培を行ったりしているのかはなしを聴くことができ、身近に環境問題に取り組む方がいることを知った。
- ・ 19年7月 自然観察会「植物ってなに」「食物連鎖のトップランナー」「生態系」について学習し、自然界のすべての生き物がバランスよく生きていかないと自然環境が壊れてみんなが生きていけなくなることを感じ取った。

3) 身近な環境教育の取り組み

- ・ 5種類のごみの分別に取り組むために、クラスごとに活動を工夫し分別に取り組んだ。
- ・ 残飯を活用した肥料の活用を学校での利用だけでなく、保護者・地域には学校便り等を通して周知を行い化学肥料ではない有機肥料の活用をすすめた。その結果、保護者は授業参観の帰りの持ち合える人が多くなった。また地域では自治会の会合で紹介したところ、活用したいとの申し出が少しずつ増えてきている。
- ・ また給食の残飯の減量に取り組むために、学校生活時間を変えるとともに、給食準備の時間を5分増やすことに取り組んだ。
- ・ 全校では、早寝早起き、朝ごはん運動に取り組んだ。2年目の取り組みとなり、保護者にも少しずつ周知が図られてきている。
- ・ キッズキングダム(学習発表会)では、昨年度多くのごみが出たため、児童代表委員会及び児童実行委員会がごみの減量をテーマのひとつに加えて取り組んだ。その結果、ごみを3分の一にすることができた。

6. 所 感

この度の理科・環境教育によって得られた成果から、本校においては学習指導要領が新しい学習指導要領及び横浜版学習指導要領に移行しても、地域にある自然と地域に住んでいる地元の人々、そして地域の自然を支えてくださっているボランティアのみなさんとともに学び、子どもを育てていくことを再確認することができた。

子どもたちは自然にたくさん触れることにより感性を磨き、たくさんの人と出会うことにより自分だけでなく生きているのではなく、自然や地域の人に支えられて生活していることを実感できた。

7. 今後の課題や発展性について

今後の課題は、生活科と総合的な学習の時間を見直し、「四季の森公園」を材とした教育課程の整備である。今までも活動の場として活用ができていたが、各学年の活動や学びの柱と発達段階の整理が不十分であったところを改善していきたいと考えている。

地域の中で育ち、地域とともに学ぶ自分のふるさととして実感できる環境教育を進めて生きたいと考えている。

8. 発表論文、投稿記事、メディアなどの掲載記事

特記事項なし。